海上の森に関する　野鳥誌掲載記事

＜「海上の森」全域の保全を！ 愛知万博環境影響評価実施計画書へ意見書提出＞
（No.613　１９９８年８月号　p.42）

＜愛知万博はアワセメントを超えられるのか？－アセスの実施方法を縦覧中＞
（No.611　１９９８年６月号　p.40）

＜海上の森の野鳥たち 愛知県支部＞
（No.604　１９９７年９／１０月号　p.40-43）

＜二〇〇五年万博は「愛知」に問われる「自然との共生」＞
（No.603　１９９７年８月号　p.46-47）

＜「愛知万博」計画 ＢＩＥ調査団に「海上の森」での開催不適当の見解を表明＞
（No.597　１９９７年１月号　p.37）

＜各部の動き 保護調査センター 「愛知万博」計画について愛知県に要望＞
（No.596　１９９６年１２月号　p.38）

＜里山奮闘記 第１回＞
＜万博誘致で揺れる海上の森［日本野鳥の会愛知県支部］＞
（No.595　１９９６年１１月号　p.36-37）

＜愛知万博シンポで推進派と反対派が論戦　愛知万博で円卓会議開催を要望＞
（No.584　１９９５年９／１０月号　p.21）

＜愛知万博の会場、自然保護関係者らが通産省などに予定変更申請＞
（No.574　１９９４年１１月号　p.19）

● ＜活動＞

「海上の森」全域の保全を！ 愛知万博環境影響評価実施計画書へ意見書提出

（No.613　１９９８年８月号　p.42）

６月１日、本会は、日本自然保護協会、世界自然保護基金日本委員会とともに２００５年日本国際博覧会協会事務局と、愛知県土木部を訪れ、環境影響評価実施計画書への意見書を提出し、合同記者会見を行いました。

本会からの意見書では「多くの人にやすらぎを与えるとともに多様な生物を育む『海上の森』全域の保全を目指すべき」と会の立場を表明したうえで、（１）会場計画と調査結果の公開、（２）正確な調査、調査結果の公開、（３）第三者機関による実施計画書の内容の検討、（４）環境保全措置においては影響の回避を十分検討すること、等について計画書の内容を検討・改善すべきことを強調しました。

博覧会協会は、意見書の概要とそれに対する自身の見解を県知事・関係市町村長に提出し、意見を求める段階に入ります。通産省から出された通達では、その後、事業者は実施計画書について通産大臣に技術的な助言を求めることができるようになっており、これは通産省が、再度専門家による検討を行うことを意味しています。この制度はぜひ活用されるべきです。

こうした点も含め、今後も博覧会協会などに、会場の森全体の保全こそ重要との考えを伝えながら、来年施行される環境影響評価法の先取りとして行われるこのアセスメントが、真に「２１世紀における人類共有のモデル」となるように働きかけてを続けていきます。

なお、意見書全文は日本野鳥の会のホームページでご覧いただけます。（保護・調査センター／小坂正俊）

●＜活動＞

愛知万博はアワセメントを超えられるのか？　　ーアセスの実施方法を縦覧中

（No.611　１９９８年６月号　p.40）

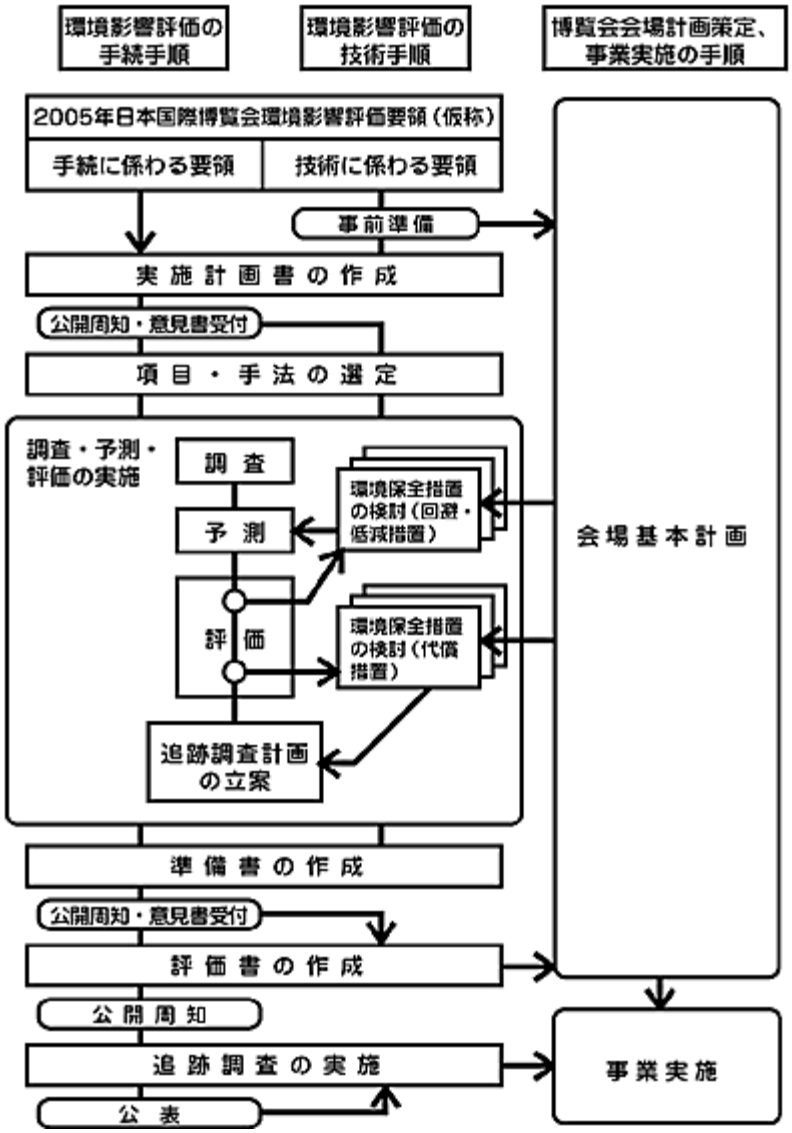
２００５年国際博覧会（いわゆる愛知万博）の環境影響評価の方法についてまとめた「実施計画書」の縦覧が４月１７日、始まりました。これは通産省の召集した専門家による検討会の結果を受け、万博の実施主体である２００５年日本国際博覧協会がまとめたもので、６月１日まで意見を募集しています。

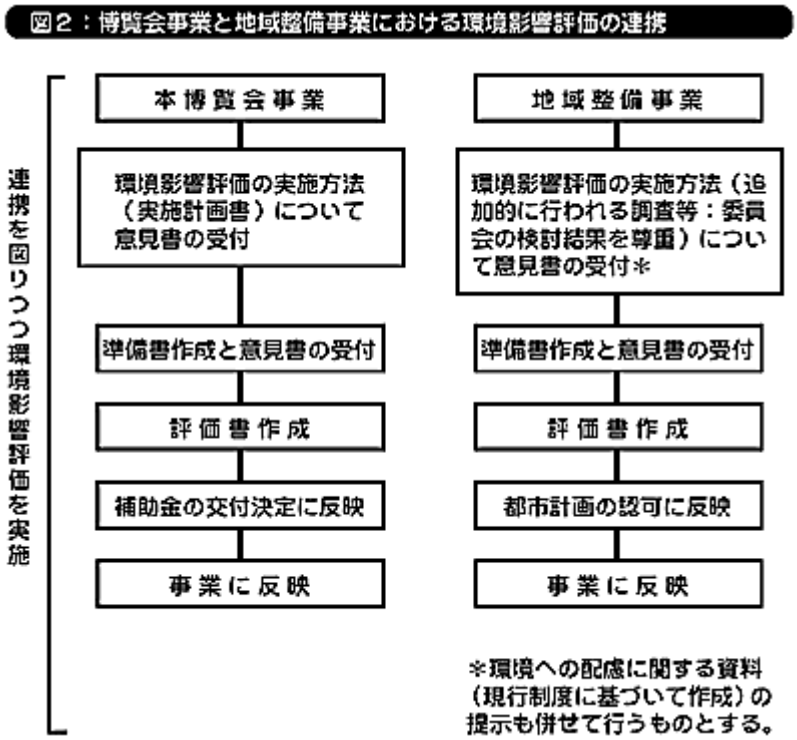
このようなアセスメントの方法に関する市民からの意見書受付は、来年施行される「環境影響評価法」に新しく盛り込まれた手続きです（図１参照)。環境との共生を標榜する愛知万博では、この新しい法律の方法を先取りして行うこととされています。もう１つ目新しいのは、愛知県が行う「地域整備事業」と呼ばれる万博の跡地利用事業（道路建設、住宅都市建設）との連携をはかる、とされていることで、新住宅都市整備事業、名古屋瀬戸道路の環境影響評価実施計画書も愛知県により同時に縦覧されています（図 2)。

このように愛知万博のアセスメントは手続き的には、従来の法律によらないアセスメントには見られなかった方法を取り入れています。しかし愛知万博の問題は、地域整備事業の計画が先行しており、しかも愛知県内に残された数少ないまとまった面積の里山環境である海上の森を分断する形で計画されていることに大きな問題があります。また愛知県は地域整備事業を旧来の手続きで押しきろうとしている意向も感じられます。

意見書は住所国籍等に関わらず、誰でも提出できます。新しい法の精神や手続きを活かすには、市民の立場からの監視と参加が不可欠と考え、本会も里山保全と鳥類の保護の観点から意見書を作成中して提出します。

図１：博覧会における環境影響評価の全体フロー





（図１・２ともに、2005 年の国際博覧会に係わる環境影響評価手法検討委員会・平成 10 年 3 月 24 日発行「2005 年の国際博覧会に係わる環境影響評価手法検討委員会」より引用）

（保護・調査センター）

● ＜特別企画＞

海上の森の野鳥たち 愛知県支部 （No.604　１９９７年９／１０月号　p.40-43）

アカゲラ

「えっ、この森を壊して万博をやるのですか？」これは、初めてこの海上の森を訪れた人のほとんどが口にする言葉です。それほどこの森は動植物が豊かで、訪れた人に万博とは無縁の存在と思わせるような場所なのです。

われわれ愛知県支部がここで探鳥会を始めて６年近くになろうとしています。その間に観察された野鳥は１１９種で、そのほとんどが山野の鳥であることを考えると、いかに多いかが容易に窺えると思います。

雑木林の秋
エナガ
輝く紅葉

中でも危急種のオオタカはこの森のシンボルともなっており、県支部の万博反対のステッカーのモデルにもなっています。昨年の繁殖期に東京からオオタカの専門家を呼んで繁殖調査をしましたが、営巣しそうな木の回りには足跡だらけで、同時に調査をしていた調査会社がどうも妨害をしたと思われるような状況で結局繁殖は認められませんでした。しかし、われわれのメンバーの粘り強い調査では、この森の上空でディスプレイフライトが観察され、人為的な妨害さえなければ繁殖の可能性は十分あると思われます。また最近では絶滅危惧種のヤイロチョウも確認されており、この森の包容力を感じます。

ルリビタキ

ここでわれわれは探鳥会以外にも毎月１回『海上カレンダー』と名付けたホタル観察会、シデコブシ観察会、秋に鳴く虫観察会などのイベントを行っており、一般の市民もたくさん参加しマスコミも積極的に取材、報道をしてくれています。また有志でキャンプをして、夜のヨタカ、フクロウの声を楽しんだりしています。

この森を守る運動は、当支部だけではなく他のいくつかの自然保護団体も行っていますが、その全員がこの森を一生の友だちにしていきたいと言っていますし、もしこの森が無

くなったらどうして余暇の時間を過ごしていいのか分からないとも言い合っているところです。

　全国の自然を守りたいという人たちと連携してここでの万博開催を何とか阻止していきたいものです。ぜひ一度この森を訪れていただきたいと思います。
（もりしま・たつお／愛知県支部・編集長）

イラスト・牧野紀子
（「海上の森の野鳥たち」より）

● ＜活動＞

二〇〇五年万博は「愛知」に問われる「自然との共生」

（No.603　１９９７年８月号　p.46-47）

６月１２日、国際博覧会事務局（ＢＩＥ）の総会で、２００５年国際博覧会の愛知県での開催が決定されました。

愛知県と通産省の作成している誘致計画では、会場は瀬戸市南東部の通称「海上の森（かいしょうのもり）」と呼ばれる里山。この地域は、多くの希少生物の生息地を含み、県下のかつての丘陵地の生物相をとどめています（本誌９６年１１月号・１２月号）。今や愛知県下では貴重な存在となったこの里山をどう守るかが、今後の焦点となってきます。

通産省が発表した資料「２００５年国際博覧会」によれば、テーマは「新しい地球創造：自然の叡智」。基本理念には「２１世紀に、私たち人間が取り戻さなければならないものは、自然と生命への共感にみちた、叡智のふるまいなのである。」といった表現も見えます。従来のテクノロジー一辺倒の開発をやめ、自然の叡智を再発見しようというのがこの事業のめざすところである、ということが理解できます。

一方、会場構想図を見ると、博覧会会場となるＡゾーンと域内幹線道路、都市計画道路は、東から西へ流れるいくつもの水系を横切っており、水系の上流と下流、また平地側と山地側を分断する形で設定されています。Ａゾーンのエキスポ・プラザ、エコパークＩなどのメイン会場は、「海上の里」と呼ばれる農村地域とちょうど重なっています。ここは現在は、自然と調和した昔ながらの生活が営まれている場所なのです。

通産省の文書中の「環境を考える」という項目では、里山が生活と文化を生み出して来た点、瀬戸地方の里山が荒廃と復旧を繰り返しつつ、希少な生物の生息地となってきた点にふれつつ、「こうした里山の自然を守るためには、人為の影響をほとんど受けない原生自然の保護とは異なる考え方が必要であり、生物多様性の保全に配慮しつつ自然に対する積極的な管理と創造を図ることが必要です。」としています。こうした基本認識は大筋では了解できるものの、その認識と実際の構想の間のギャップは現時点では大きすぎると言わざるを得ません。特に、伝統的な自然利用の様式と短時間で行う大規模事業は、自然へのインパクトと回復に要する時間が大きく異なるため、同列に論じるわけにはいかないという事実は重要です。

今後はじまる環境アセスメントにおいて、県の担当者は「従来ある基準にとらわれずに、理想的なアセスを行う」と明言しています。事務局では里山を守る、という通産省と愛知

県の公約が実現されるよう、その過程を厳しくチェックしてゆくと共に、真の意味での自然の叡智の再発見、自然との共生について広く問いを発していきたいと考えています。（保護・調査センター）

● ＜活動＞

「愛知万博」計画 ＢＩＥ調査団に「海上の森」での開催不適当の見解を表明

（No.597　１９９７年１月号　p.37）

１１月１８日、本会は万博開催に関する調査のために来日した博覧会国際事務局（ＢＩＥ、本部パリ）予備調査団のヒアリングに応じ、他自然保護団体や地権者の方と共に、現在会場に予定されている瀬戸市の「海上の森」での万博開催は不適当である旨の見解を表明しました。

２００５年万博に立候補しているのは愛知県の他、カルガリー市（カナダ）、ゴールドゴースト市（オーストラリア）の合計三か所。このうちどの都市で開催するかについては、来年６月のＢＩＥ総会で加盟各国の投票により決められます。今回の調査団は、これに先立つ１２月総会で、各国に誘致の状況を報告するために派遣されたものです。

瀬戸市で行われたヒアリングは市民やＮＧＯの意見を聞くために設けられ、４５分という限られた時間で英・仏語によるプレゼンテーション、質疑応答が行われました。出席したのは地元を代表して海上の森市民会議、アースデイ名古屋、本会愛知県支部の３ネットワーク・団体と、地権者の代表、それに世界自然保護基金日本委員会、日本自然保護協会、本会の全国組織３団体です。地元グループからは、自然環境の保全に関し今の万博計画が抱えている問題点について大部の資料が提出されました。本会愛知県支部は瓜谷支部長らが支部編集の写真集「海上の森の野鳥たち」を手渡し、野鳥の生息地として海上の森をピーアール。また、会場予定地内に住んでいる地権者の方からは、土地を一切譲渡しない旨の公正証書が公開されました。本会塚本副会長からは「里山の自然を愛する多くの地元市民団体の声を無視しないでほしい」というメッセージと共に、見解書を托しました。

団長のノゲス駐仏モナコ大使館参事からは、「きょうの内容は報告書の中に盛りこみ、加盟各国の報告する」という内容のコメントがありました。

● ＜活動＞

各部の動き 保護調査センター 「愛知万博」計画について愛知県に要望
（No.596　１９９６年１２月号　p.38）

愛知県が誘致を行っている「２００５年国際博覧会」に関して、会場候補地選定の再考を求める要望書を９月３０日、愛知県知事宛に提出しました。

愛知県外ではほとんど報道されていませんが、愛知県は万国博覧会の候補地として、カナダのカルガリー市、オーストラリアのゴールドコースト市と共に立候補を表明しています。県の計画で会場の候補として挙げられている瀬戸市南東部の「海上の森」の自然と愛知県支部での取り組みについては、１１月号の「里山奮闘記」でもご紹介しました。

現在公表されている会場構想は、里山の自然環境保全という観点からも、またオオタカ等の希少種の保全という観点からも、現在ある自然環境を破壊するおそれが強く、疑問が多い場所選定と考えられます。

愛知県は博覧会のテーマに地球規模の環境保全をうたい、また環境庁の指導で当初の会場構想の修正なども行ってきました。しかし、肝心の会場選定については、説明のないままです。

自然環境の保全という観点から考えると、瀬戸市内の陶土採掘跡の荒廃地や名古屋市周辺などの都市再開発地等、環境破壊を伴わない用地が考えられ、実際にそのような提案が地元の市民団体等から出されています。しかし、現在までの構想や、県主催の万博開催に関する県民シンポジウム等では、こうした代替地に関する議論もほとんど行われてきていません。

そこで今回の愛知県知事宛の要望書の中では、海上の森に住むさまざまな生きものたちの多様性を守るという立場から、以下の４項目を要望しました。

１ 生物多様性条約および環境基本法に基づき、自然環境の保全を最優先に会場選定を行うこと。
２ 現在の会場候補地選定にいたる検討記録を公開し、現会場候補地が最適であるとする根拠を示すこと。
３ 県民と保全生物学の専門家の参加の下で、会場候補地の選定をやり直すこと。
４ 「海上の森」を含む、岐阜県境にかけての丘陵地一帯の貴重な生物相を守るための全体

計画を早急に立てること。

万国博覧会は国家規模の大きなイベントで、税金からの支出も千億単位の多額なものになることが見込まれています。こうした公共的な事業によって、貴重な里山の自然が壊されることのないよう、今後も関係省庁への働きかけ、世論の喚起と支部への支援を行っていきます。

● ＜里山奮闘記 第１回 ＞

万博誘致で揺れる海上の森［日本野鳥の会愛知県支部］

（No.595　１９９６年１１月号　p.36-37）

海上の森とはどんなところか

「海上の森」はかいしょのもり、と呼ぶ。名古屋市から北東へ約２０キロ、「せともの」で有名な瀬戸市の南東部に広がる丘陵地帯で、面積は約千ヘクタールに及ぶ。

近くの高台から現地を一望すると、一見、起伏の乏しい平凡な丘陵地の森である。スギやヒノキの人工林に変えられている部分も目だつ。しかし一歩足を踏み入れてみれば、印象は一変する。丘を刻む幾筋もの小川、小さな湿地やため池がひだの多い豊かな地形を作り、下流の裾野には水田が点在している。

「こういう場所は４０年くらい前までだったら、名古屋市の市街地をちょっとはずれたら、どこにでもありました。でも今じゃあ、どこ行けばあるかっていうと、どこにもありゃせんですよ」。オオタカの調査を精力的に続けている村瀬貞彦さんは言う。

実際この地域には、シデコブシ、トウカイコモウセンゴケといった東海地方にしか分布しない希少な植物を筆頭に、多くの動植物の生育が県の調査でも明らかになっている。オオタカ、ハチクマも生息し、支部の調査では、生息期間や行動などから見て、これらが繁殖している可能性はきわめて強いという。探鳥会等で確認された鳥種はこの９月で 111 種にのぼった。

「名古屋の市街地から車で２０分しかかかりません。なのにこの風景。信じられないでしょ」。月例探鳥会の世話役の宮永正義さんは笑顔で胸を張った。

万博の候補地！？

瀬戸市では明治時代から、陶器を焼く薪や原料の粘土をとるために林が徹底的に切られ、大正の初めには至る所はげ山という状態にあった。海上の森はそうした状況から、クロマツ等を植林する長い努力を通じて回復した森という。

愛知県が、２００５年に開かれる万国博覧会を誘致する、と公式に発表したのは１９８９年４月。以来、一貫して会場の候補地に挙げられているのがこの地域なのである。

愛知県支部の人たちが海上の森の存在に気づいたのは、皮肉なことに万博誘致計画が発表された後だった。

「地元で自然観察会を続けている人に声をかけられて、ともかく行ってみたんですよ。そしたら、オオルリやサンコウチョウはさえずる、サンショウクイは飛び回る、なんでこんないいところ知らなかったのかな、って。鳥だけじゃなくて、カブトムシやクワガタムシ、トンボ、むかしよく採って遊んだような虫もどっさりいるんです」。副支部長の山本卓也さんは海上の森の魅力をそう語る。

愛知県の発表では、なぜ海上地域を会場予定地に選らんだのかが全くあきらかにされていない。疑問に感じた支部では、県に対して質問や要望を行うと共に、海上の森のかけがえのなさを伝える行事を始めた。月例探鳥会、ゲーム性を持たせた「バードラリー」、「海上カレンダー」と名付けたホタルやムササビ、ギフチョウや植物など鳥以外の生きものたちに焦点をあてた観察会である。

支部報では海上の森の自然を紹介する長期連載をはじめ、それ以外にも募金や抗議行動の呼びかけ等を紙面で逐一知らせるようにした。昨年のバードソンには「コーワ海上オオタカチーム」というチーム名で出場、海上の森の名前を全国的に印象づけた。

支部の会員を中心にした「海上の森くらぶ」も１９９３年に発足した。こちらは毎月、第４土曜日が観察日。運営に当たる坂松久熙さん、森島達男さん、村瀬さん、宮永さんはいずれも支部の役員でもある。「地元中心のグループができたので、すばやい対応も取れるようになりました」と宮永さん。

バードウィーク写真展。オオタカステッカーの作成。１０月には写真集「海上の森の鳥たち」も出る予定。７月までに記録された１０９種全種について、写真とイラストで紹介している。英文の対訳をつけて海外の人にも内容が伝わるようにした。

海上の森のゆくえは

海上の森を守りたいという声を上げている市民グループは、愛知県支部だけではない。ここをフィールドとして長く観察会を行ってきた「ものみ山自然観察会」をはじめ、１１も存在している。今年の５月には、これらの人々が語らって実行委員会を作り、万博のメイン会場予定地を取り囲む「ヒューマン・チェーン」が実現した。参加者およそ５００人。６月には市民、市議、地権者でつくる「海上の森を守りパリへ行く市民会議」の一行がパリを訪れた。支部からもカンパを募って４人が参加した。博覧会国際事務局（ＢＩＥ）の

総会に合わせ、海上の森の自然を破壊するおそれのある現在の計画の不備を事務局と参加国の委員に訴えるためだ。１１月９日には約６０の市民団体の参加を得て、第２回のヒューマンチェーンが行われる。

１１月中旬のＢＩＥ事務局調査団来日に合わせ、調査団と多くの県民に、海上の森での万博開催がどういう意味を持つか、考えて欲しいと同実行委員会は考えている。参加目標人数は２００５人。事務局の調査結果は１２月総会で報告され、来年６月に加盟国よる決選投票が行われる。

「私たちは決して、万博自体に反対しているわけではないんです。県は自然と共生する万博をやると言っています。それをきちんと実行すれば、海上の森を会場にはできないはずだと主張しているだけです。県が会場を考え直してくれるまで、みんなでできるだけのことはします」。山本さんたちの表情は不思議に明るい。それはつきあうほどに魅力あふれる海上の森から、目に見えない力を受け取っているからだろうか。

● ＜インフォーメーションファイル ニュース＞
愛知万博シンポで推進派と反対派が論戦
（No.584　１９９５年９／１０月号　p.21）

愛知県瀬戸市への誘致が計画されている愛知万博の是非を討論する初のシンポジウム「愛知万博問題について考える」が７月１日、名古屋市中区の名古屋市弁護士会館で開かれ、聴衆約１５０人を前に、推進側の県と反対派市民団体が白熱した議論を展開した。（読売新聞７月２日朝刊）

愛知万博で円卓会議開催を要望

愛知県瀬戸市で計画されている「２１世紀万博」について、「愛知県野鳥保護連絡協議会」（小柳津弘議長、１３団体）は７月３日、鈴木知事に円卓会議開催を求める要望書を提出した。これに対し同県万博対策局は「公開討論はどのようなテーマ・方式が適当か研究を進めたい」とのコメントを発表した。（読売新聞７月４日朝刊）

● ＜インフォーメーションファイル ニュース＞
愛知万博の会場、自然保護関係者らが通産省などに予定変更申請
（No.574　１９９４年１１月号　p.19）

愛知県が 200５年に同県瀬戸市での開催を目指して誘致活動を繰り広げている「愛知万博」について、「豊かな自然を破壊する」と抗議している地元の自然保護関係者らが３日、通産省などを訪れ、会場予定地の変更などを求めた。陳情したのは、日本野鳥の会の地元グループなど５団体約 2000 人でつくる「200５年万博に瀬戸市海上町を立候補予定地とするのはやめよう！ネットワーク」（鈴木宇佐美代表）。（94 年８月４日・読売新聞）